

【報告3】

若者の就職支援の現場から見た
若者が魅力を感じる福祉とは

一般社団法人
FACE to FUKUSHI
事務局長

岩本 恭典

FACE to FUKUSHI
とは

一般社団法人FACE to FUKUSHI（以下「F2F」と表記。エフトゥーエフと呼ばれている）は「日本の「FUKUSHI」を世界最高の「wellfare」に」という言葉を理念に掲げ、誰でも地域で自分らしく暮らせる社会の実現に向けて、福祉で働く「人づくり」を行っています。

これからの福祉をつくる若手福祉人材の採用・育成・定着支援を目的に、新卒学生向けの福祉就職フェアの企画運営を中心に、インターンシップフェアの企画運営、人事担当者向けの研修の実施、若手福祉従事者向けの研修などの事業を行っています。多様化・複雑

化する福祉課題の解決に向けて社会福祉法人が地域でこれからも取り組み続けられるように、福祉の未来をつくっていく人材を輩出しています。

きっかけは、現場で働く若手福祉従事者のリアルな声でした。「福祉の仕事が続けたいが、悩みや不安を相談できる仲間がない」「悩みはあるが、福祉という仕事は続けたい」という想いに応えるため、前身である「一般社団法人全国若手福祉従事者ネットワーク」を経て、2015年にF2Fを発足しました。

我われの目標は、福祉の仕事が「おもしろい！働いてみたい！」と思われ、就職の選択肢にあたり前のように入ること。そして、働いている人がやりがいをもって働

き続けることができ、成長できる社会をつくることです。法人名の「FUKUSHI」には、日本の福祉をより素晴らしいものにしていきたい、世界のスタンダードに

していきたいという想いが込められています。福祉が憧れの職業ナンバー1になることをめざして、日々活動しています。

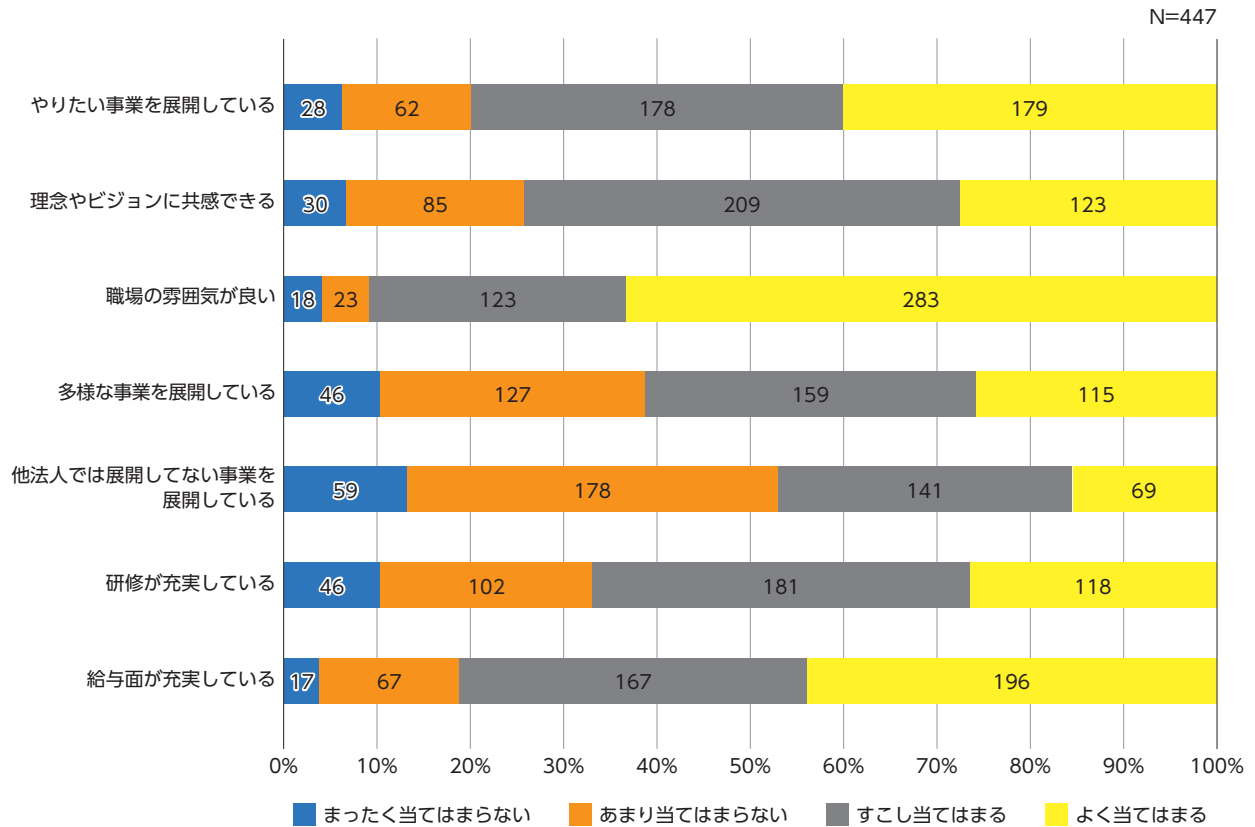


福祉就職フェア当日の様子（共同代表のオープニングトークの場面）



福祉就職フェア当日の様子（笑顔で説明を聞く学生）

図表1：就職活動時、就職先を見つける際に重視していたもの



F2Fが見た、学生の就職活動と就職先選択の決め手について

F2Fでは、2018年11月に、福祉現場で働いている若手職員（大卒で入職し、1〜3年目の若手スタッフ）を対象に、どのような就職活動を行ったか、また、どのような点が就職先を選択する決め手になったかという意識調査を行いました。全国の福祉事業に取り組む、社会福祉法人やNPO法人などに勤務する400名以上の若手職員が回答してくれました。集まった回答を通して、若者の就職活動の実態や、法人側に求められている期待が見えてきました。

どういう言葉で、どのようなツールを使って、どのような内容を学生に伝えればいいのか、迷うところもあると思いますので、このアンケート結果を大いにご活用いただければと思います。

まずは、「就職活動時、就職先を見つける際に重視していたもの」についての回答をご覧ください

い。(図表1)

「やりたい事業を展開している」「法人の理念やビジョン」に重点を置いて就職先を選んでいることがわかります。別の設問で「合同企業説明会に出展している社会福祉法人のブースに訪問した理由」についても尋ねたところ「自分のやりたい事業を展開しているから」と答えた若者が80%を超えました。

F2Fの仮説では、「土日が休み」「夜勤がない」「転勤がない」という選択肢に回答が集まるのではないかと考えていましたが、その点は若者にとっては、優先順位は高くない点であり、それよりも、「自分が理想として思い描いている支援や事業に取り組んでいる法人なのかどうか」という点に重点を置いているようです。自分の興味のある分野や事業は何なのかということにしっかり向き合い、就職活動を行っている様子うかがえます。

法人にとっては、「他法人との差別化をどのように図るか」は、

悩まれる部分なのではないでしょうか。若者が就職先を選択する際の着眼点として、地域の課題に合わせて「他法人では展開していない独自の事業を展開しているか」「多様な事業展開をしているか」という点があります。F2Fが主催している就職フェアや業界研究イベントなどで学生とかかわっていて感じるのは、制度外事業についても興味があり、課題に応じたサービスをつくり出していくという過程にやりがいを感じる若者が多くいるということです。その団体が展開する事業にほかと違った際立った特徴があり、もっと法人について知りたいと思えば、インターンシップやボランティアをしたいという行動につながっていきます。「ほかではできない、チャレンジ」がこの仕事でできるかもしれないことを発信したり、つくれたりするかもしれないというワクワク感、働きたいという意欲につながります。そのような若者は、サービスを利用する人の日々変

わっていくニーズに対応するため、既存のサービスを組み合わせたり、新しいサービスを創造したりすることができるクリエイティブな思考をもった法人に惹かれ、就職先として選択する傾向があります。そのような若者の期待に応えられる法人であること、また、他法人との違いが若者にしっかりと伝わるのが重要です。

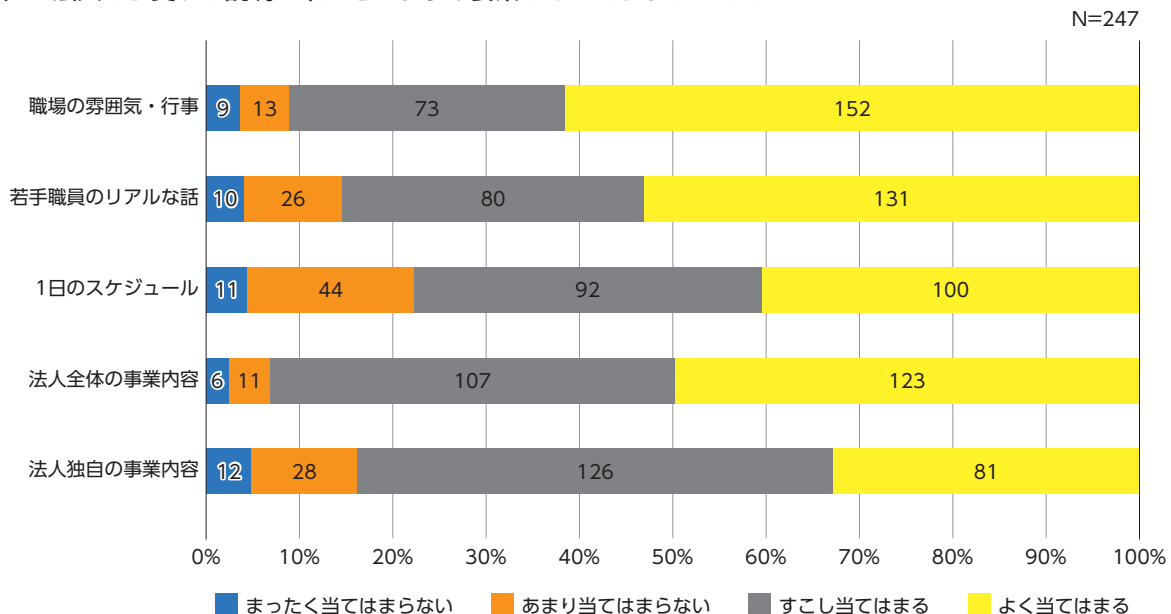
合説でのブースづくりのポイントとは？

社会福祉法人が人材を採用するにあたり、合同企業説明会へ参加したり、個別説明会を開催したりする場面もあるでしょう。その時に、学生（求職者）は何を見ているのか、選ばれるブースと選ばれないブースの違いは何なのかを探るべく、「法人から受ける説明のなかに、どのような要素があったらよかったか」という質問を用意しました。（図表2）

法人側は何を準備すれば、学生の期待に応えることができるので

しょうか。「ブースでの説明で聞きたかったことは何ですか？」という質問に対する回答から見えてきたのは、「職場の雰囲気・行事」「若手職員のリアルな話」を重視する回答が多く、法人紹介のパンフレットやホームページなどから読み取ることができない、実際の様子を知りたがっているということでした。「法人の全体の事業内容」「法人独自の事業内容」についても、8割以上の学生が「話を

図表2：法人から受ける説明の中にどのような要素があったらよかったか



聞きたい」と回答しています。パンフレットやホームページにも掲載されている情報と重複をしたとしても、実際に働いている職員からしっかりと話を聞いて理解したいと思っ

また、「1日のスケジュールを知りたい」という回答も多く、入社した後はどのように働いているのか、あるいは休みはどのように取れているのかを知りたいという声も目立ちました。入社した後の先輩の様子を実際に聞くことでイメージが湧き、印象に残るようです。

別の質問では、「ブースに若手職員がいるとブースに入りやすい」という回答も多く、年が近いスタッフが対応してくれることで、学生は安心感や親近感をもって、説明を聞くことができ、選考にも進みやすい傾向があります。説明会の限られた時間のなかで、自法人のPRポイントをしっかりと伝えるためには、自法人のPRポイントを明確にしたうえで、若手

職員が自分の言葉で学生に伝える練習をしておくことが重要です。

F2Fでは、若者に福祉の魅力を伝えるために、若手職員向けに「福祉魅力発信研修（通称FMH）」を行っています。若手職員はまずは自法人の理念や事業内容について深く理解し、また、なぜ自身がその法人を就職先に選んだのかという点を掘り下げます。そして、就職フェアや説明会の場で、学生の前に立った時に、自分の言葉で法人概要を説明し、どのような点が自社の魅力であるかを伝えることができるようになります。この研修を通して、若手職員は他法人の若手ともつながることができ、自法人とは違った視点を得ることができて刺激的だということもお声もいただいています。

社会貢献活動が、人材確保にとってもよい効果になる

若手人材の採用活動を行うときに、まずは「若者を知る」ことが

重要であると考えます。若者が何を求めているのか、何が知りたいのかわからないままに、やみくもにプロモーション活動をして、「よくわからない、大変そうな業界」としか映りません。若者の実態をよく知ったうえで、「選んでもらう努力」をしなければなりません。福祉現場で働く職員自身も

福祉の仕事の面白さや可能性を伝え、ほかの法人との違いをPRしたり、充実した仕事ぶりを見せたりすることで、若者は惹きつけられ、選ばれる業界になっていきます。社会福祉法人に求められている、社会貢献事業や、地域共生社会の中核を担う取組が、他法人との差別化を図れる部分であり、社会にとっても学生にとっても必要とされる活動であるのではないのでしょうか。

また、人材の獲得・定着・育成のそれぞれの課題は車の両輪のようなもので、獲得に特化した施策を集中して行ってもその後の定着・育成の部分で疎かにすれば、「思っていた仕事と違う、キャリア

アパスや将来が見えない」という不安が蓄積し、いずれ離職の問題として表面化します。そうならな

いたために、法人側・経営者側の意識変革や、恒常的なやり方は見直す必要もあるでしょう。人材確保の課題を解決するの

に、一朝一夕で効果が感じられるような特効薬はありません。また、一つの法人や地域だけが頑張ればよいものでもありません。社会福祉法人が今後も継続的・発展的にサービスを提供し続けるためにも、法人や地域という垣根を超えて福祉の魅力を発信していくことが必要です。よりよい取り組みは業界全体でシェアし、一丸となって息の長い活動をしていくために、F2Fは全国の団体とつながりを持ち、人材採用・育成・定着の課題に対して全面的にバックアップをしながら、ともに福祉業界の発展にこれからも全力で取り組んでいきます。